はるきくん
の
ぼうさいごっこ

まるやまあいこ　たけいはるか　いわなみゆうか
はなむらちひろ　よしかわあいこ

夕方から 雨が 強く 降りはじめました。
はるきは 雷が 鳴らないと いいなと 思いながら
お姉ちゃんの なつみちゃんと テレビを みています。
そろそろ パパも 帰ってくる ころです。
「ママ、こんやの おかずは なあに？」
と なつみちゃんが ききました。
「今夜はね、みんなの 好きな…」
と ママが いいかけた 瞬間——

ピカッ ガシャーン
ゴロゴロゴロゴロゴロ...

大きな 音がして
近くに 雷が 落ちました。
部屋の 明かりも、テレビも 消えて
あたりは 真っ暗に なりました。
「ママー」
と はるきは こわくなって ママを
よびました。
「こわいよー」
と よこで なつみちゃんの 声も
きこえます。
「ママは ここに いるから 大丈夫よ。
だから 動かないで。」
と いって、ママが そばに 来ました。
「停電だわ。早く 直らないかしら…。」
と ママが いいました。

そのとき——

カチャッ
ドアが 開く 音が しました。
はるきは こわくなって ママに ギュッと しがみつきました。
「はるき、なつみ、ママ、大丈夫か？
近くに 雷が 落ちたみたいだよ。」
という 声が きこえて、
３人は 懐中電灯の まぶしい 明かりに 照らされました。

「あっ、パパだ。おかえりなさい。」
はるきは パパが 帰ってきて ほっとしていいました。

その時 パッ と 明かりが つきました。

「あっ、あかるくなった！よかったあ！」
と はるきは ほっと して いいました。
そして、パパをみて、
「その おおきな リュックは なに？」
と 聞きました。
「この中にはね、大きな 地震や 洪水で、避難しなくちゃいけない 時に 持っていく ものが 入っているんだ。
この 懐中電灯も ここに 入っていたんだよ。」
と パパは 答えました。
「そうよ。いつでも すぐに 持って 出られるように玄関に おいてあるのよ。」
と ママも 答えました。
「そうか！このまえ おおきな じしんが おきた ときは、でんきも みずも ないって テレビで いっていたもんね。」
と 思い出しながら はるきは いいました。

「そうだ、今夜は 電気も 水道も 火も 使えなく なってしまった
ときのために 練習してみましょうか。」
と ママが みんなに ききました。
すると みんなは ママの いうことに
「わーい、たのしそう！ぼうさいごっこだ。」
と いって 賛成しました。

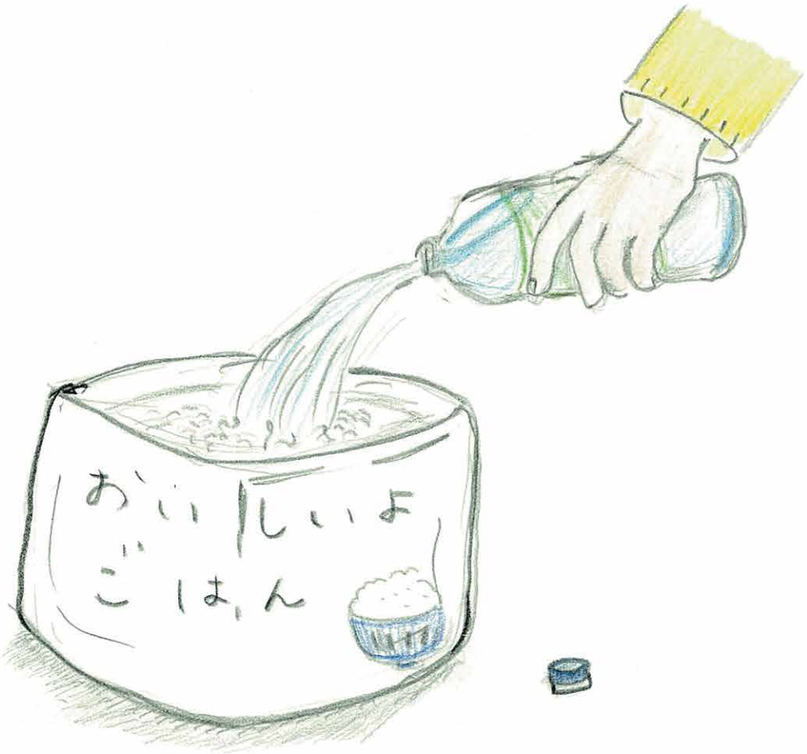
パパは リュックから ろうそくを 出して テーブルに 立て 火を
つけました。
そして ママが
「じゃあ 電気を 消すよ。ぼうさいごっこの 始まり 始まり。」
と いって スイッチを パチンと 切りました。

部屋は ろうそくの 明かりだけに なりました。
みんなの 影が 壁に 映っています。
暗くなると、はるきは ちょっとだけ 不安に なりましたが、
誕生日の パーティのような 気も しました。

遠くで 雷が 時々 ゴロゴロ と 鳴っています。
そのとき クウーッ と はるきの お腹が 鳴りました。
「ぼく おなかすいたー。」と はるきが いうと
「そういえば 晩ご飯が まだだったわね。」
と ママが いいました。
「でも でんきも ひも みずも つかえないのに、どうやって
ごはんを つくるの？」
と なつみちゃんが ききました。

「そんなときは、非常食と いって
火を使わなくても 作れる ごはんを たべるんだ。」
と いって、パパは リュックから ごはんの 絵が 描いてある袋を
取りだしました。
「ちょっと まてよ。これは どうやって 作るんだろう？」
と パパは こまった 顔を して いいました。

「ここに 水を いれたら いいのかしら…あらあら！このごはん、
水を いれてから 1時間も 待つんですって！」
と ママは びっくりして いいました。
「1じかんも？！すぐに たべられないの？」
お腹が すいている はるきは がっかり しました。
「とりあえず 水を 入れて みましょう。」
と いって ママが リュックに はいっていた ペットボトルの 水を
その袋に いれました。



「こんなのも あったぞ。」
といって パパが リュックから 魚の 缶詰を とりだしました。
はるきは たべるものが あって ほっと しました。
「えーと 缶切りは どこだ。」
と パパは リュックの中を 探しました。
「あっ、缶切りを 入れ忘れた。」
パパが 頭をかいて いいました。
ママは 台所から 缶切りを 持ってきて 缶を あけました。
「いただきまーす。」
と はるきは 缶詰の 魚を 一口 たべてみましたが
「おいしくなーい！」
と いって たべるのを やめてしまいました。
「いざというとき 食べ物は とっても 大切だから、はるきや なつみが
たべられるような ものを 入れて おかないといけないな。」
と パパが いうと
「そういえば、テレビで はるきの 大好きな ウインナーの 缶詰も
あるって いってたわ。」
と、ママが いいました。

　しばらく して
「そろそろ ごはんも たべられる ころね。」
と ママが ごはんの 袋を あけました。
袋の中を みて
「ちゃんと やわらかい ごはんに なってる！」
と はるきは びっくり しました。
「ぼく たべてみる。」
と はるきは いって ごはんを 一口 たべてみました。

しかし、ごはんは おいしかったけれど 冷たくて、味が なくて
いつも たべている あたたかい ごはんの ほうが
もっと おいしいなあ と 思いました。
すると ママが
「さっきの 魚の 缶詰と いっしょに たべたら おいしいわよ。
今日みたいに ならないように 作り方も しっかり みてから
買わないとね。」
と いいました。
　リュックの中に 一緒に 入っていた クッキーや チョコレートも
みんなで 分け合って たべました。

すこし お腹が いっぱいに なって はるきは
「なんか ねむく なって きちゃった。」
と いって 大きな あくびを しました。
「今夜は ちょっと 早いけれど そろそろ 寝ようか。」
と パパが いって、銀色の 布団を リュックから 取り出しました。
「今日の 布団は うすいから、みんなで くっついて 寝ましょう。」
と 毛布を 持って きた ママが いいました。
「みんなで くっつくと あったかいね。」
と はるきは うれしそうに いいました。
枕元の 携帯ラジオ から「大雨注意報解除」の ニュースが
流れて きました。
「あしたは きっと はれるね。」
と ニュースを きいて なつみちゃんが いいました。
「そうね、明日は 非常食や 足りなかった ものを
買いに 行きましょう。」
と ママが いいました。
「今日は 準備した リュックの 中で 足りない ものも わかったし、
ぼうさいごっこ を やって よかったな。」
と パパが いうと
「また ぼうさいごっこ したい。」
と はるきが いいました。

はるきは、今日の『ぼうさいごっこ』を思い出して、
みんなで 協力すれば どんなときも 大丈夫だなあ と思いながら
眠りにつきました。

あとがき

2011年３月11日の東日本大震災を経験し、自然災害の多い日本で暮らすためには、私たちひとりひとりが、防災、減災、自己防衛の意識をしっかり持って生活することが大切だとあらためて認識しました。

いざという時のための避難訓練や準備を、それぞれの立場で真摯に実行し常に点検を怠らないことが必要です。

この絵本は、家庭でできるささやかな一つの方法を紹介するものです。

なおこの絵本は　長野県短期大学　幼児教育学科３年　造形演習Ⅱの科目受講生により制作されました。

また長野市との幼児防災啓発連携事業として制作されました。

参考文献　「被災ママ812人が作った子連れ防災手帖」つながる.com企画
「自分たちのまちは　自分たちで守る」長野市防災会議編

この本を作った人たち

さく　え　長野県短期大学幼児教育学科３年
丸山愛子　武井遥　岩波佑果
花村ちひろ　芳川愛子

監　　修　長野県短期大学幼児教育学科造形研究室　小林亮介
長野市総務部危機管理防災課　山口正樹

印刷製本　株式会社　信光社

発　　行　2012年11月